紅い花

（四）出会い　前編

琉　紅

（四）　出会い

水平線から上った太陽は、小さな島を照らして、海面で光の粒を作る。それらを跳ね返すように、沖には大きな船が停泊していた。

港から遠く、珊瑚礁を避けて錨（いかり）が下され、帆が閉じられた。

鼻息荒い大きな白馬に乗り、長刀を左腰に差した騎士を先頭に、後方に三騎が続いて浅瀬に上陸した。狭い空間に閉じ込められていた馬たちは、今にも駆け出さん勢いだった。

彼らは、必死にそれを鎮めている。

黒色の着物を羽織った、明らかに身分の高そうな若者を中心に、武士の姿をした取り巻きが三人。

白馬に乗った若者だけは武士特有の髪型をせず、後ろへと伸ばしてまとめている。まるで無法者の海賊の頭領に見える。だが身のこなしに品格さが感じられ、鼻は高く、容姿端麗な顔立ちをしている。

島の村長と村人等が出迎えた。

「これは、白馬とは珍しい」

村長はその馬の白い肌が本物であることを確認するか如く、首筋辺りを手で触れては、指先で擦る。削り落とせるもので、本来の馬の茶色に実は、白の漆か何かを塗っているのではと、疑っている。

若者の口元が緩む。

「明国から買い入れた。これも交易のなす所以だ。様々な生き物が手に入るぞ」

「しかし何故、あなた様がこの島に？」

「命（ニライ）の根元（カナイ）に一番近いとされるこの島を一目、見たかった……朝日を伴い、金色の光の中にある姿を見たとき、身震いしたぞ」

村長は、頭を下げたままだった。

若者は、ゆっくりと馬を降りた。

その動作に若者特有の覇気が無く、周りの静けさに同化していた。

彼に続いて、他の騎士も同じ行動を取った。

「それにしても静かな島だ……」

村長は返答した。

「島の多くの男達は、中山の兵士として出て行き、死して戻されました。無事かどうかも分からない者も」

久高島の若者は日頃、漁業を営み体が鍛えられていた為、すぐに兵士として徴用されたのである。

漁師は集団で船を出し沖の網を扱うため、リーダーの意見

に従わないとうまくいかない。それは軍隊の構造と似ている。また農民と違って、荒っぽい気性は最前の兵として有効であるとして、中山は利用した。
若者は、嫌なことを思い出す様に、
「中山の先王、武寧を打ち負かした巳志。あいつらの兵の扱い方は乱暴だ。更には、異国の武器をも使う」
「……」
一人、小柄な若武士は、場を取りなすように切り出した。
「私達の事は内密で」
「もちろんです。礼はそれなりに、よろしくお願いしますよ。さあ、こちらへ」
若武士等は馬を引きながら、村長に導かれ村落に向かって歩き出した。
平坦な地が広がり、太めの木々の群集が所々、その中に家が隠れている。左手奥に高地、それを覆うように原生林が密生している。
馬の嘶き声が響き渡り、島の雰囲気が一変した。
一行は村の大屋敷に通された。
貴重な木材を多用した家であった。
若武士は入り口にある木に、白馬を結びつけようとしたが馬は落ち着かず、暴れて手に負えない様子だった。
嘶きを聞きつけて、絣姿の少女が屋敷から現れた。
美久だった。
「あら、波に揺られ、とても疲れているわ。まだ足元が揺れているのね」
と、白馬の首筋に優しく触れ、胸元を軽く叩くように撫で、額をしばらく抑えると、目を細めて静かになった。
若武士は目の前で起きた出来事が信じられないと、
「そなたは、誰に馬の扱い方を習ったのか」
「父です……剣術も、私の体に染みついています。しかし中山の騎兵として、二年前、死にました。北との戦いでと……聞いています」
若武士は深く息を吸い、目を伏した。
「我々は……休戦中だが、気の毒だ」
若者が言わんとしている事に気がついた。
「あなた達、私の父を殺した北の者ね」
「戦さだぞ！　この島さえも巻き込まれているだろう」
地面を指さし、睨み返す。
「……」
若武士は問い尋ねる。
「ところで、お前はここで何をしている？」
美久は真顔で近づき、

「この家の奥に、小さな部屋があります。本島から取り寄せられた書物を、そこで整理しています」
「漢文が読めるのか？」
「ええ、村長から漢語を習いました。今日も、本島から船が来るということで、朝からここで仕事をしています」
「そうか」
「私は、この島から外に出たことがありません。大きな町を見てみたいのです」
　若武士は頭を振った。
「そんなに良いところではない。私は、この島に希望を見い出しに来たのじゃ」
「小さい島に居ると息苦しくて、もっと外の世界を見てみたい。それに神人（かみんちゅ）になると、島から出られないので、今なら……」
「はっはっ……」
　若武士の笑顔は、その場では初めてだった。
（女の身で、外を見たいとは面白い）
　これまで愛する女性を失い、生きる喜びをも失ってしまった様な彼が、美久と話をするたびに、少しずつ新しいエネルギーが蓄積されていくのを周りに感じさせた。それは彼の口調が次第に変わっていくことで証明している。
「中山は、琉球全土に休戦を約束している。今は平静さが戻っている。……そうだな、外へ出るには、今が一番いいかもしれないな」
　美久の目が煌めいた。
　村長は睦まじく見える二人に、話かけてきた。
「美久、丁度良かった。この方に島を御案内しなさい。くれぐれも粗相のないようにな」
「承知しました」
　と、美久は軽く頷いた。
　若武士は白馬に勢いよくまたがり、美久に手を伸ばした。
　美久は、
「このような狭い島で馬を使うのは、どうでしょうか」
「馬の気持ちが分かるそなたと、一緒に乗ってみたいのだ」
　不思議と、美久も右手をさっと差し出した。自分でもどうしてなのか、分からなかった。
　すぐに勢いよく引き上げられ、後ろへ乗せられた。
　警備の武士等は馬を使わず、村長も駆け足で追従した。
　しばらく進む中、不意に若武士は前のめりになった。美久がクバの樹木の前で馬を止めたからだった。
　彼女が右手で軽く馬の腹部に触れただけで、馬は彼女の意

思を理解したのである。
　目前の森は、神秘的な雰囲気を漂わせていた。奥はうっそうとしており、木々や大きなクバの葉で覆われて、水分を含み生命の源の様相をしている。
「ここからは入ってはいけない聖地です。人の生命を意味する精霊の集まる場所、母となる女性だけが、許される場所なのです」
「ならば、ここに……」
（真鶴がいるのか）
　若武士は木々の奥に目を奪われた。
　馬から下り、強引に足を踏み入れようとする。
　我を失い、そこに引きずり込まれて行くように見える。
　右手を森の入口に差し出し、左手を胸に当て、進みゆく若者の心、
……
　愛する真鶴と、再び会いたい。
　苦しめた日々を、謝りたい。
　魂そこにあるのなら、戻せるのなら。
　北山城の宿命を、受け入れず。
　自分の全てを、捨ててもいい。
　二人で別の人生を、選んでもいい。
　でも、どうしても……
　去ってゆくのなら、別れを伝えたい。
　それが叶わぬなら、私もここで、
……
「やめてください！」
　美久は急いで馬を下り、後ろから両手で彼の右腕を掴み、
「神の怒りに触れます。偉い方々でも、たとえ王様でも入れません！」
　その甲高い声は、彼をこの場に戻すのに十分すぎる程だった。
　若者は美久の両目を覗く、
「尚巴志（しょうはし）なら、力ずくで入るだろうな。お前を切り捨てても」
　と、言い放ち、顔を背けて森の入口へと。

美久は、がむしゃらに彼を止めようとする。細い体で、鍛えられた男の体の動きを制していた。彼女のどこにそんな力があるかと、感じさせる程だった。
それでも、じりじりと彼は森へと向かっていく。
美久は不意に木の根に足が引っかかり、その場で重なり合うように若武士と共に倒れた。
「嫌！」
大きな体が美久の上に覆い被さる。
若者は、美久の体がクッションとなり、フワッと浮く感じを受けた。
お互いの顔面が衝突するかのように近寄り、美久は咄嗟に自分の顔をそらすが、偶然にも唇が触れ合い、歯もぶつかったのか美久は一瞬、痛みを感じた。
「賢龍殿！」
後から、駆け足で追い着いた武士らは、慌てて賢龍を起こした。
美久もゆっくりと、手の平に付いた土を払いながら立ち上がった。
小柄な武士は、息を切らしながらも刀を抜いて、美久に刃先を近づけた。
「この場で切り捨ててやる！」
その武士は、自分のやるべき仕事がついに行動に移せたと、満足感の溢れた顔だ。
「潮平、止めろ」
と、賢龍は手を広げた。
美久は仁王立ちして、
「賢龍様、潮平様、これが武士のやり方ですか。どうして自分の都合ばかりで、その土地のしきたりに敬意を払わないのでしょうか。私は死んでもここを通しません。神人としての義務です」
「何だ。さっきは、まだ神人になりたくないような事を言っておったが……それにしても女なのに、怪力だな」
賢龍の口元に笑みが漂う。
「……」
頑として、動かない怒った顔の美久が、そこにはいた。
「美久が、何か失礼をしましたか？」
と、やっと追いついた村長は、当惑した表情で彼に近寄る。
美久は、お尻あたりの絣の汚れを落とし、下唇に指先を当ててなでている。
そんな彼女を賢龍は指差し、
「いや、この娘と……あれだ、気を利かせろ」
と、微笑む表情に、武士等は緊張を解いた。

つづく